

学校教育における学校図書館の役割

—田中敬の理論から展開する学校図書館のあり方—

上 道 葉麻美

〔抄 録〕

現在の学校教育では、「総合的な学習の時間」の導入や週5日制の実施によって学校図書館の役割が再認識されつつある。しかし、学校教育において学校図書館や公立図書館はどのような役割を果たしていくべきか、その理論の検証は十分に行われているとはいいがたい。

そこで本稿は、1916年（大正7年）に『図書館教育』という著作を表し、教育と図書館の関係を検証した田中敬の理論をもとに、現在の学校教育と図書館の関係について明らかにした。田中は、明治以降の図書館界を図書館の研究活動を行うことでリードしていった人物であり、著作の多い人物と評価されている。⁽¹⁾『図書館教育』を検証すると、田中は学校教育において図書館の利用を経験することは、卒業後の図書館利用率を高め、読書習慣の基礎を築くことになり有効なことであると述べている。

さらに、この理論を受けて今日の学校教育における学校図書館や公立図書館の役割を検証すると、学校図書館と公立図書館が連携することで児童、生徒の学習をより良いものにすることができるのではないかと結論付けた。その方法としては、学校図書館が公立図書館に働きかけ蔵書検索やレファレンスサービスを受ける利用法があげられる。このような公立図書館のサービスは、学校教育で行われる調べ学習の際に必要なとなってくる補助的な機関としての役割であるといえる。一方で、公立図書館が学校教育のカリキュラムを理解し、それに合わせた資料を用意して提供したり、ブックトークやお話会の出張を行う公立図書館が主体となった連携も考えられる。

このように学校教育を通じて学校図書館と公立図書館が連携することは、児童、生徒の目を公立図書館の利用に向けさせるきっかけとなり、生涯学習社会において図書館の利用を継続的なものにするためにも重要なことであると考えられる。

キーワード 田中敬、学校図書館、学校教育、公立図書館、生涯学習

はじめに

田中敬は1880年(明治13年)に兵庫県で生まれ、東洋大学を卒業後、1916年(大正5年)に東北帝国大学の司書となる。そして司書となった2年後の1918年(大正7年)にはじめての著作となる『図書館教育』を執筆した。大学で司書として勤める以前から図書館界に関わっていたものの、図書館界に入って約7年で執筆されたものである。その後、1923年(大正12年)には、東北帝国大学の書記に任命された。そして、1933年(昭和8年)に東北大学を退官し、同年、大阪帝国大学に赴任し、事務嘱託(図書館勤務)となった。そして終戦を迎え、戦後は近畿大学に迎えられ、1958年(昭和33年)に78歳で亡くなるまで、様々な大学の図書館学の講師としても活躍し、さらに1952年(昭和25年)には、近畿大学の図書館長に就任した。

本稿では、田中の著作である『図書館教育』を中心に田中の考える教育における図書館の役割を考察するものである。今日の学校では、週5日制の実施や「総合的な学習の時間」の導入により図書館の役割はさらに重要なものとなっている。しかしながら、教育における学校図書館や公立図書館の役割について理論的な検証はあまり行われておらず不十分であり、学校図書館においては方法論が先走っているように見受けられる。そのため教育と図書館の関係を改めて検証し、今後の教育における図書館の役割を追求していくことは意義深いものとする。

本稿ではまずI章で、田中は学校教育において図書館をどのように位置付けていたのか、田中のはじめての著書である『図書館教育』から検証を行う。この著書は、当時それまではライブラリーエコノミーの立場から論じられることの多かった図書館活動について、ライブラリーサイエンスの立場で検証したものとして評価されている。⁽²⁾

続いてII章では現在の学校図書館利用に関して、データをもとに検証を行う。そこでは、田中の理論をもとに学校図書館の利用状況を中心に検証し、学校教育における学校図書館の役割、さらには公立図書館と連携した学校図書館の役割について述べる。

また、学校図書館と公立図書館の連携によって児童、生徒の生涯学習活動にも展開することのできる学校図書館のあり方をも検証したい。

I. 学校教育における図書館の意味

田中は、著書『図書館教育』において学校教育における図書館のあり方を示すため、「学校教育の成全要素としての図書館」と題して一章を設けて詳しく説明している。

そこで、本章では田中の著書である『図書館教育』を中心に、学校教育において図書館はどのような役割を果たすべきであるかと田中は理論付けていたのかを検証する。また、『図書館教育』では主に小学校と図書館の関係について述べられているため、本章でも小学校教育に焦点を当てて論じていく。

田中は、学校の教育を「^{フォーマル}形式的で且つ^{コンパルソリー}強制的で、且つ時間に制限がある」⁽³⁾としており、図書館を「^{ヴォランタリー}非形式で時為的で実際上の時間の制限がない」⁽⁴⁾と述べている。そして、学校教育において教科書以外の図書を読む習慣を身に付けていくことは、学校教育を終えたあとの「非形式的」な教育を生涯続けていくためには有益なことであるとしている。さらに、図書を卒業と同時に不必要なものになってしまう単なる教授用具として扱うべきではないと述べている。

このように、学校教育において図書館は、「非形式的」な教育を生涯続けていくために読書習慣を身に付けるための場所であるにとらえることができる。これは、今日の生涯学習において図書館の役割が重要視されていることに通じるものがあるといえる。または、一斉授業で画一的な授業を行う学校教育のシステムのなかで、図書館を利用することは職業選択をする際に役立つものであるとも述べている。それは、統一された授業のなかでは、個人の適性を考える猶予はないため、図書館を利用して、幅広い知識を深めることで将来の職業を考える手助けになるという考えからである。

次に、田中は具体的に小学校教育において図書館をどのように利用すべきであるかと述べていたかを検証する。

まず、田中は学校と図書館が連携して図書館の利用を促す必要があると述べている。これは、図書館の価値が認められてくると、公立小中学校が競って学校図書館⁽⁵⁾を設置し、各々で蔵書を充実させようとする。そうなれば、その地方の図書館の蔵書に重複が出てくるため、当時の財政状況を反映すると無駄が生じると考えた。そこで、行政区のなかの公立図書館と学校が共同して蔵書の重複を避けて収集することで経費を削減し、効率の良い学校図書館を形成することを奨励していたのである。

さらに田中は、学校教育のなかでの図書館の役割について、図書館利用の進んでいるアメリカとイギリスの図書館を例にあげて説明を行っている。そして、日本の現状を鑑みるとイギリスの実践例を実行に移すべきではないかと述べている。

田中は、学校教育に関わる図書館の存在として、児童用の図書館（以下、児童図書館）と学校図書館の2つにわけてその重要性について述べている。2つの図書館については、現在の児童図書館と学校図書館の意味とは異なる図書館に捉えられており、児童図書館は公立図書館に併設された児童用のスペースもしくは、専用の部屋と解釈されている。また、学校図書館においては、公立図書館から分配された図書を並べておく部屋、もしくは学級文庫という意味合いで用いられている。双方とも公立図書館と一体となった施設といえ、このように公立図書館と学校が一体となって行動する理由には、予算の負担を軽減することが目的のひとつになっている。

このように現在の学校図書館との設置環境と大きく異なっているため、これについても詳しく検証していく必要はあるが、本稿では田中の理論を検証するため、その意味の違いや目的の違いについては詳しく述べず、田中の考える学校と図書館の関わりについての検討にとどめておきたい。

1. アメリカにおける学校と図書館の関係

学校教育において図書館は、前述したように読書習慣を身に付けさせるために必要であると田中は述べている。これにより、児童には早期から図書館に慣れさせておく必要があり、そのために児童にあった図書館が必要になってくるとしている。そして、児童のための図書館、つまり児童図書館においては、適当な案内と管理が必要であるとしている。

児童図書館について田中は、アメリカにおける児童図書館の発達を例にあげて説明し、その始まりは、図書館の一角に児童向きの図書を集めた「児童隅」と呼ばれる場所からであったと説明している。そして、「児童隅」が発展し、その後は児童室を別室に設けることとなった。しかし、この児童室を別室に設ける理由には騒がしい児童が大人の読書を妨げるというものによるものであったが、そのような理由から児童室を分離とすることは、無理に行う必要はないと述べている。

このような、発達を遂げ、読書習慣を身に付けさせるために必要であるとした児童図書館の施設はどのように整えていくべきか、またどのような施設であるべきか田中は詳細に説明している。そこで『図書館教育』の説明にあわせて主だったものを検証していく。

まず、児童図書館の蔵書のあり方について田中は、「図書の選択」と表現しており、「図書の選択は大切であるが、あまり厳格に過ぎては却て面白くない結果を招く」⁽⁶⁾と述べている。この図書の選択については、道徳上に不都合が生じない限り児童の好む図書は何でも選択していくべきであるという考えによるものである。本書によると、当時文学的価値のないものは図書館から排除すべきであるといった議論が交わされており、その背景を踏まえた上で述べられた意見である。田中は、どのような図書を選択するかを議論するよりも、まずは読書に対する「児童の趣味が善く養はれて」⁽⁷⁾いくことができれば良いのではないかと考えている。

また、図書の選択に関連して、児童図書館を利用できる年齢を制限することについて田中は制限するべきでないとしている。それは、読書をするには難しい年齢の児童に対しても、絵本などを選択することで利用を受け入れることは可能であり、できるだけ早くから図書館に通う習慣をつけておくことが図書館教育においては必要であるとの考えからである。そして、田中は「図書館は学校と唇歯輔車の関係を有って教育の効果を大ならしめようとする」⁽⁸⁾ものであるため、図書館の役割を果たすためには児童の受け入れを制限することは無意味なことであると述べている。

図書の選択について、児童に読みやすい絵本を含め選択することで児童の利用を促し、読書習慣を身につけさせようとした田中の理論を説明した。このほかに、現代の図書館ではあまり収集されることない図書以外の絵画標本の選択について田中は次のように述べている。

第一に、児童図書館は、美術館でも博物館でもないので技巧的に優れているものや珍奇なものではなく、また一定の場所に置いておく必要のないもので選ぶべきであるとしている。しかしながら、あまりにも平凡なものや稚拙なものはふさわしくないため、児童の興味を喚起し、

望みの方向に児童の注意を向けられるような選択が好ましいとしている。また、大人にとっては面白いと思って子どもには興味を示さないものがあるので、選択の際にはその点についても十分に注意を払う必要があるとしている。しかしながら、この時点では具合的な基準は明らかでないために、今後検討していく必要があると述べている。

また図書館は、学校の授業の進行状況に応じて単元に関連する絵画や標本を示すことで、児童の関心を引くことができ、また学校で学んだことを、より深く理解できるようになると述べている。そして、これらの有益な経験を得ることで、児童は自然と図書館に足を運ぶことになり、図書館を通じたこれらの行動が学校教育に効果をもたらすと述べている。

さらに、博物館のない都市では図書館に空室のある限り、その地方の特産の鉱物や昆虫類、鳥類などを主題を持って展示し、ときおり展示を変えていく利用方法もあると述べている。そして、展覧会に即した講演会を開くことも教育的意義があるとしている。展示に即した講演会を開催することで、児童の興味をより高め、展示に関する図書が多く読まれたという実践報告があることをあげて田中は説明している。

このように、田中は現代の図書館の役割と一線を画し、博物館の役割をもつ図書館のあり方について述べている。このことは児童の図書館の利用を促すためには、図書といった文字からの情報を得るだけでなく、視覚や聴覚から受ける影響によって図書館に興味を持ってもらい、その結果、図書館を利用するきっかけになってほしいとの意図が見られる。さらに、当時日本では博物館がその役割を十分に担っていない現状を踏まえて、図書館がその役割の一部を果たし学校教育に活かしていくべきではないかと田中は考えていたのではないと思われる。

以上、図書館の蔵書や絵画標本といった資料を児童にどのように提供していくべきかについて述べた。次は、児童が図書館を利用する際の管理運営面について、田中の考えをまとめてみたい。

まず、図書館の雰囲気作りとして田中は、「監視の程度」という言葉を用いて説明している。それによると、当時の図書館のあり方について「図書館に於ける児童の監視が余りに行き届き過ぎて居りはしないか」⁽⁹⁾と指摘し、「始終何も彼も指示するよりは寧ろ彼ら自身で発見するやうに子供に委して置いた方が良いのではなからうか」⁽¹⁰⁾と述べている。これは、知的情操を育むためには、図書などを自分自身で発見したときの喜びに勝るものはないため、監視を厳しくするのは児童に弊害があるのではないかという考えに基づいている。そして、図書館を厳格に管理するのではなく児童に自由に使わせることによって、自分自身で読みたい図書を偶然にも発見しその内容を自分自身で理解できたときには、その図書は児童にとって特別の知恵として一生離れないものになるからだと説明している。

さらに閲覧室では、児童の趣味を満たせるように、また居心地の良いものにして、自由に楽しく読書することができるようにすべきであるとしている。そして、このような環境を整えるために、いくつかの規律を作る必要があるとしている。⁽¹¹⁾それは、「規律と自由」と題して説

明している。これによると、自由は望ましいものであるが、無規律を意味するのではなく、規律のない自由は無法の状態であり真の自由ではない。そのため、真の自由の裏には規律が潜んでいるため、常に両者が相伴っていなければならないとしている。この理論を受けて田中は、学校のように厳格で厳しいものである必要性はないものの、閲覧室には閲覧室にあった規律が必要であるとしている。それは、図書を書架から出したり、貸し出すときの手続きに伴う騒音や、図書を介しての議論等は「^{ライブラリーノイズ}図書館雑音」であるため迷惑ではなく、目的もなく走り回ったり、図書に関係のない雑談は閲覧者の利用を妨げるため、取り締まる必要があると述べている。

このほかに、児童図書館の利用に関するものではないが、アメリカで実施されている「図書館科」の設置についても田中は必要性を説いている。この「図書館科」とは、現代の言葉に訳するならば、図書館利用教育であり、さらに情報リテラシーを身に付けるために設置すべきと考えられた学科といえる。このような学科を設置する理由として田中は、高等教育を受けた一般民衆でさえも、公共図書館の利用法を理解していない人があり、また様々な蔵書からどのような知識が得られるのかを知らない人が多く見受けられるためであるとしている。そして、将来、公共図書館の利用者になるであろう児童に対して、「図書館資料」の授業を通じて利用法や図書館の仕組みを説明することで図書館を科学的に利用してもらいたいとの意味を図書館員は持っているために必要な学科であると述べている。

このような「図書館科」の講義を児童図書館を設置している図書館はもちろんであるが、児童が利用できる施設を持っていない図書館においても卒業時期になった児童を対象に行われ、ある程度の年齢制限を行って開設していると説明している。また、この学科では3段階に分けた講義を行うことを田中は推奨している。それは、第一段階では図書館の設置の目的や、市民の税金によって図書館が設立されているといった図書館の施設そのものを説明するべきであるとしている。続いて第二段階では、図書館の資料、つまり図書を主眼においてその扱い方等を説明し、図書を大切に扱うことの重要性を学んでもらう必要があるとしている。そして、最後の第三段階では、図書がどのように利用者に役立つかといったことを説明し、さらに目録の利用法などの解説も行い図書を活用するための講義にする必要があるとしている。

以上のように学校教育における図書館の役割について田中は、アメリカの児童図書館の実践を例に明らかにした。これをまとめると次のようなことがいえる。

まず、学校と図書館は児童の生涯のなかで必要となる読書習慣を身につけるために共同して行動していかなければならないということである。これは、図書の選択で児童が好む絵本を選ぶことや、図書館の利用に年齢制限を加えず、早い段階から学校と図書館が協力して図書館に慣れさせることで読書習慣を身に付けていくことができると説明していることからわかる。

次に、絵画標本の収集において図書館は、学校の授業内容を把握し、その内容に基づいた展示を行うことで学んだことをより深く理解することができる。そして、この展示によって学校教育のカリキュラムをより効果的なものにするという理論が展開されている。こ

これは、図書館が絵画標本の利用することで、さらに図書の利用にもつながると考えたと思われる。学校教育のカリキュラムにあった図書を公立の図書館に所蔵することで、学校教育と密接な関わりをもつ必要があるといえる。この考えは、第二次世界大戦後の昭和28年に制定された学校図書館法の第四条「学校図書館の運営」⁽¹²⁾の項目にも通じる部分があり、興味深い。

また、「図書館科」と名付けられた学科の設置は、今日の図書館利用教育や情報リテラシーの活用に通じる考えであり、大正期にすでにこのような理論が示されていたことは意義深いことである。

2. イギリスにおける学校と図書館の関係

次に学校図書館の意義について田中は、イギリスの実践を例にあげ説明している。

まず、田中の論によると学校図書館は、1876年にアメリカで始まったものであるとしている。その仕組みは公共図書館が学校に蔵書を貸与し、学校は「スクールライブラリー学校図書館」または「クラスルームライブラリー教室文庫」として共同で図書館を運営するというものであった。

イギリスの事例を説明する前に田中は、まず学校図書館の設置の目的を説明している。そこには、「在学生徒に面白き書物を読ませて彼等を楽しませるにあるのであるが、それはやがて児童をして娯楽並に修養に関する書物に親しましめ、さらに彼等が学校を卒へたる後に於て公共図書館の閲覧者たらしめるものである」⁽¹³⁾としている。つまり、学校図書館は学校教育の課程において読書に親しむきっかけを作り、将来は公共図書館の利用者となる場所であると述べている。

イギリスにおいて学校図書館は、アメリカより遅れること8年の1884年に設立され、公共図書館の蔵書を学校図書館に貸し出し、それを学校図書館に所蔵して児童に貸し出したものが始まりであるとしている。そして、公共図書館から提供される蔵書をいくつかの学校で定期的な交換し、蔵書を変える工夫を行っている都市もあると述べている。その際、蔵書は公共図書館から提供されるが、設備費等は学校の負担であるとしている。

このように、イギリスでは公共図書館から図書の提供を受けていることは、アメリカのように資金が潤沢でないことが大きな理由であると田中は指摘している。そして公共図書館から図書の提供を受けることで、児童にとっては公共図書館の存在意義を確認し、やがて図書館の利用範囲を広げていくための役割をも果たしていると田中は述べているとしている。

さらにイギリスの児童図書館については、アメリカよりも20年以上前に設立されていたとしている。その児童図書館とは、設置される以前にはある一定の年齢に達するまで子どもの図書館の利用を禁止していたものを撤廃し、児童に貸し出しをはじめ、その後は児童図書館専用の目録も作成したという流れをもつことを説いている。

しかし、イギリスにおける児童図書館の田中の記述は少なく、議論も余り活発ではなく、アメリカの児童図書館と同様の活用案などが示されている程度である。

Ⅱ. 学校教育における学校図書館のあり方

前章で、田中の著作『図書館教育』をもとに学校教育と学校図書館の意味を検証した。その理論の多くは、現代の学校図書館のあり方に合わないものが多い。しかしながら、現代の学校図書館を検証する過程で基礎となる歴史的な流れを参考にすることは、今後の学校図書館の方向性を考える上で重要な役割を果たすのではないと思われる。また、田中が主張した学校教育のなかで図書館利用の習慣を身に付けさせ、一生涯の学習につなげるという理論は、今日の生涯学習における図書館の活用につながる意見といえる。そこで、本章ではこの理論に基づき、学校図書館と公立図書館がどのような役割を果たすことによって生涯学習活動につなげていくことができるのかを検証する。

1. 学校教育における学校図書館の利用

学校図書館法（昭和28年公布）によると、学校図書館の目的は「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であることにかんがみ、その健全な発達を図り、もって学校教育を充実すること」（第一条）とある。また、第二条によると、学校図書館は「(前略) 図書、視覚聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料を収集し、整理し、及び保存し、これを児童又は生徒及び教員の利用に供することによって学校の教育課程の展開に寄与するとともに、児童又は生徒の健全な教育を育成すること」ともある。つまり、学校図書館は学校教育を充実させるために設置された施設であり、その奉仕する対象は児童または生徒、そして教員であるとされている。

学校教育を充実させるための施設であることから、現在では読書をする場所としての活用だけでなく、教員の教材研究の場であったり、総合的な学習の時間での調べ学習の場所として様々な形で活用されている。

このように、様々な利用方法のある学校図書館であるが、実際にどれくらい活用されているかを示したものが図1である。

図1によると、小学校での利用率は「よく利用する」と「時々利用する」をあわせると50%以上である。しかし、中学校になるとその利用率は平均で40%を下回り、高等学校では平均で30%を下回る結果となっている。この結果から、小学校では比較的利用率が高い学校図書館も中学校、高等学校と教育課程があがると利用率が下がる傾向にあることがわかる。この原因としては、資料が古く調べ学習できないことや学校図書館のスペースが狭くくつろげないといった様々なことが考えられる。

利用しなくなる理由をこの図から理解することは難しいが、小学校でこれほどの利用率があるにもかかわらず中学校や高等学校での利用率の低下が著しいことは、学年を経るごとに図書館から生徒の足が遠ざかっているということがいえる。では、学校教育において図書館につい

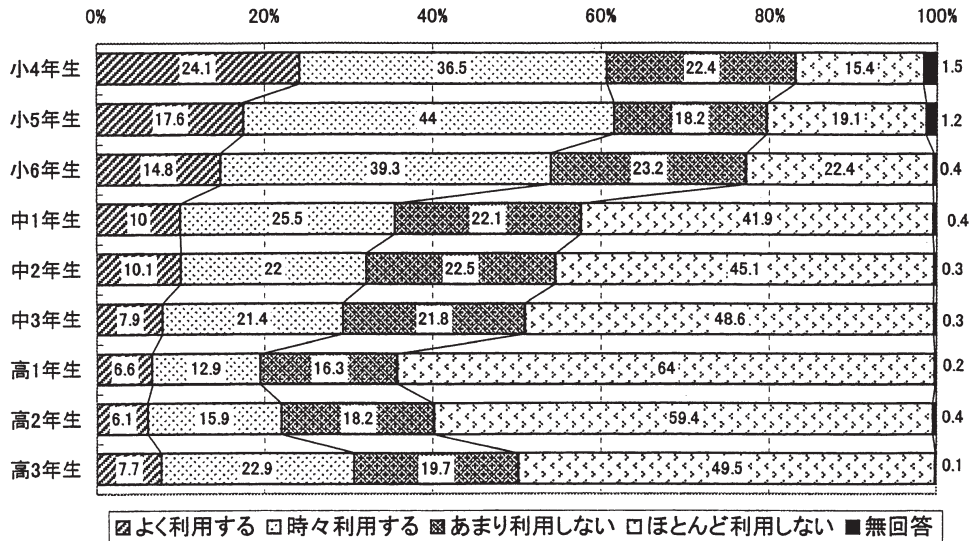


図1 学校図書館の利用

出所 「学校読書調査」2003

『データに見る今日の学校図書館 '99~'03 一学校図書館白書 4』p81より転載

て学ぶ機会となり、学校図書館の利用にも関わる図書館利用指導（以下、利用教育）はどのように展開されているのであろうか。

次に挙げる図2は、学校図書館の利用教育を年間計画として計画しているかについて調査した結果である。さらに利用教育の内容を示したものが図3である。

調査結果を分析すると、中学校の割合が低いものの、小学校と高等学校では約60%の学校で利用教育の計画が立てられており、年次計画として学校図書館の利用について学ぶ機会が与えられていると考えられる。しかしながら、高等学校では利用教育の計画があるものの、実際は

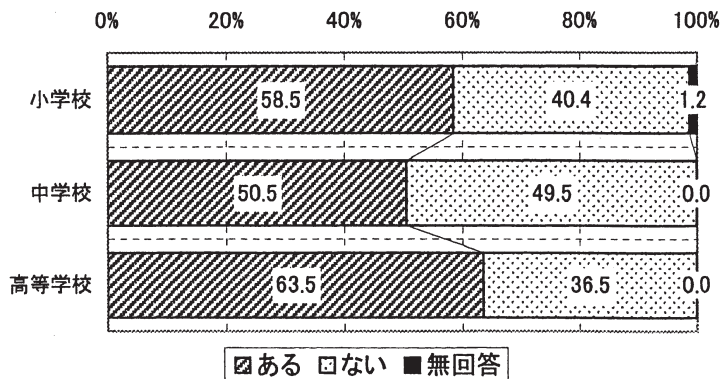


図2 学校図書館利用指導の年間計画

出所 「学校図書館調査」2003

『データに見る今日の学校図書館 '99~'03 一学校図書館白書 4』p68より転載

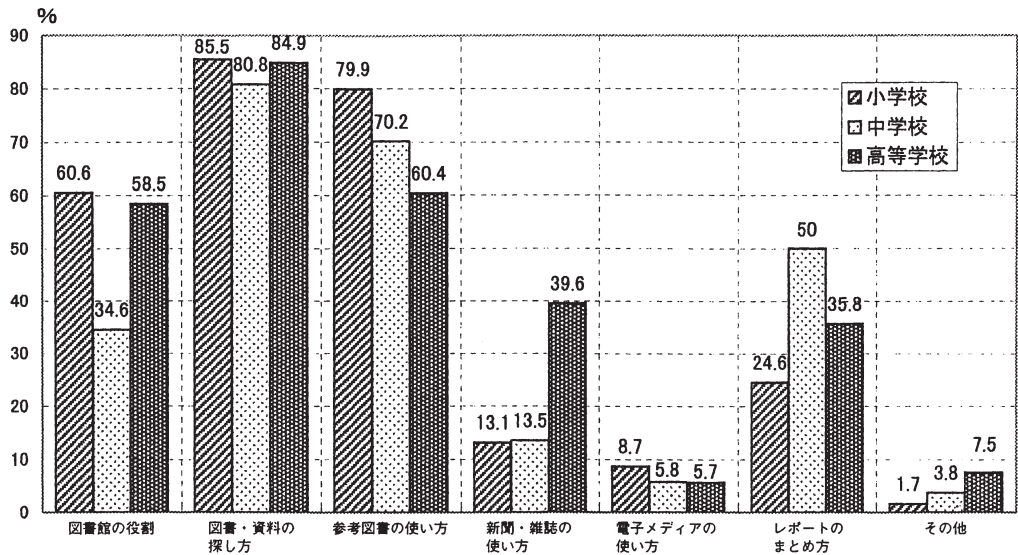


図3 利用指導の内容 (1998年)

出所 「学校図書館調査」1998

『データに見る今日の学校図書館 '99~'03 一学校図書館白書 4』p69より転載

学校図書館があまり利用されていないという状況が先の図1から証明されている。

また、図3の結果から学校図書館にある「図書・資料の探し方」や「参考書の使い方」といったソフト面の活用方法を教育のなかに取り込む割合がどの校種でも多い。しかしながら、学校教育だけでなく公立図書館への利用にもつながると考えられる図書館自体について学ぶ「図書館の役割」に対する教育が30~60%とばらつきが多い。

資料の活用といったソフト面の教育も必要であるが、図書館の役割といった基本的なことを学ぶ時間を作ることで、児童、生徒に学校図書館だけでなく公立図書館の利用を促すきっかけとなり、生涯学習における図書館の関わりが見えてくるのではないだろうか。

以上の結果から、年間計画の時間を確保したうえでさらに利用教育の計画の内容を充実させ、継続的に学校図書館を利用できるような指導に転換していく必要がある。

このように現在の学校図書館では、学校図書館の利用教育は多くの学校で行われている。しかし、その教育が児童、生徒の図書館利用につながっているとはいえない。児童、生徒の年齢があがるごとに利用率が下がっている現状を踏まえると、彼らが卒業した後も公立図書館や大学図書館を積極的に利用していくとは考えられない。図書館の利用を継続的なものとするためには、やはり学校教育における利用教育は重要な役割を担うであろう。それぞれの学校で行う利用教育が小学校・中学校単位の利用教育にとどまらず、他の学校図書館、さらには公立図書館の利用教育にもつながる内容にする必要がある。

このように学校図書館の利用教育を、公立図書館の利用を踏まえた継続的な教育として行うことの意義は、田中の述べる理論から導き出せるのではないだろうか。

2. 生涯学習につながる学校図書館の利用

前項で、学校図書館がどれほど利用されているかという現状を明らかにした。本項では、生涯学習社会のなかで児童、生徒が公立図書館につながる学習を得るために学校図書館は、どのような役割を果たしていくべきか検証する。

まず、学校教育において学校図書館の役割は必要不可欠であるが、学校図書館の資料だけでは学習に十分に対応することができない場合がある。そのようなときに、学校図書館はより多くの蔵書をもつ公立図書館の利用が必要となってくる。その場合、学校図書館と公立図書館による連携のシステムが確立されていく必要がある。このようなシステムを導入しているところとしては大阪府箕面市があげられ、学校図書館と公立図書館が連携して所蔵調査・予約・レファレンスの受付や週一回の配本活動等を行っている。⁽¹⁴⁾

このシステムを確立するためには、学校図書館が機能しており、専任の司書教諭や司書の理解があるとともに、学校長の図書館に対する理解が必要である。そして、学校側の理解だけではなく、公立図書館側にも支援する態勢が必要になってくる。その場合も、専任の司書が中心となって事業を展開していく必要がある。人件費といったコストが多くかかると予測されるが、このようなシステムが確立されれば、学校図書館では補えない図書を児童、生徒に提供することができ、教育の充実を図ることができる。さらに、公立図書館にある資料は学校図書館で購入する必要がなくなるため経費の削減にもつながる。また、学校図書館では購入されないようなジャンルも公立図書館は多く所蔵しているため、児童、生徒の新たな知的好奇心を目覚めさせるきっかけになるのではないだろうか。さらに、学校以外の公立図書館からの資料が届けられることで、児童、生徒の目を学校図書館の利用だけではなく、公立図書館の利用にも向けることかできると考えられる。そして、学校図書館は公立図書館との関係だけではなく、博物館、公民館といった他の社会教育施設とも連携を取っていく窓口としての働きができるシステムを構築していくべきである。図書館は、図書資料の扱いにとどまらず、実物を扱う博物館との連携を図ることで、より児童、生徒の学習を効果的に行えと考えられる。

一方で、公立図書館から学校図書館との連携を図っていく方向も今後は必要となってくるであろう。具体的には、公立図書館が地域の学校教育のカリキュラムを理解し、それにあった教材を学校に提供していくということや、読み聞かせ、ブックトークといった事業を学校に赴いて行うことが考えられる。現在の公立図書館は、学校図書館に対して受身の姿勢のみで役割を果たそうとしているが、児童、生徒に公立図書館の意味や役割を知ってもらうためには、待つ姿勢から行動を起こす姿勢が必要になってくると考えられる。このように能動的な役割を果たしていくことで、児童、生徒は図書館の存在を知り、生涯学習時代を迎えた現代社会において児童、生徒が学校卒業後も図書館を利用する基礎を築くことができると考えられる。

おわりに

田中は、アメリカの児童図書館やイギリスの学校図書館を事例にあげ、児童の教育における図書館のあり方を説明した。そのなかで田中の主張したことは、学校教育において図書館の利用を経験することは、卒業後の図書館利用率を高め、読書習慣の基礎を築くことになるというものである。

この理論は、現代社会の学校教育の環境と密接に関連してくることはない。しかし、この理論をもとに現在の社会と適応させて考えるならば次のようなことがいえる。

第一に、学校教育において利用教育は、図書館を継続的に利用できるようなものでなければならないということである。これは、学校図書館の利用状況を学校別に調査した「学校図書館の利用」というグラフの結果から理由を求めることができる。この調査によって小学校では約6割近くの利用があるのに対して、高等学校では約2割強の利用に落ち込んでいることがわかった。これにより、図書館の利用教育は学校ごとの利用教育にとどまらず、継続的に利用できる教育を行い、生涯学習社会に向けた図書館の利用教育としていく必要がある。また、図書館の利用教育と初めて出会うことになるであろう小学校における利用教育では、児童、生徒の今後の図書館利用を形成していく最も重要な時期にあると考えなければならない。

第二に、学校教育において学校図書館の利用教育を活発にすることは、自学自習の基礎を築く手助けとなり、卒業後の図書館利用につながるのではないかとということである。このように学校卒業後も図書館利用を推進していくためには、児童、生徒に在学中から図書館の有効性を理解してもらうことが必要であると考える。方法としては、学校図書館と公立図書館が連携し、学校図書館を通じて公立図書館の蔵書検索やレファレンス、貸し出しサービスを行うことがあげられる。このような公立図書館の利用によって、児童、生徒は学校図書館にはない資料が公立図書館にあることを知り、自らが公立図書館へ足を運び、利用するきっかけになると考えられる。さらに公立図書館は、学校図書館からの要求にこたえるだけでなく、学校教育のカリキュラムを知り、それに合わせた資料を提供していくことが望まれる。これは週5日制に伴い土曜日が休日となったことで児童、生徒の利用が少し増える可能性があり、学習に関連する資料を公立図書館がそろえておくことで、より学習を深めることができるのではないかと考えるからである。また、お話し会やブックトークを学校に赴いて行うことで、改めて公立図書館の存在を児童、生徒に認識してもらうことができると考える。

以上のように、田中の理論をもとに学校教育における学校図書館の役割を今日の状況を踏まえて検証した。本稿では、田中の『図書館教育』をもとに理論を展開したが、今後はさらに別の角度から学校教育における学校図書館の役割を検証していきたい。また、田中の『図書館教育』には、「社会教育機関としての図書館」について書かれた章があることから、この点についても今後の課題として理論の検証を行いたい。

〔注〕

- (1) 石井敦編『図書館を育てた人々 ―日本編Ⅰ』日本図書館協会、1983年、p.84
- (2) 田中敬『図書館教育』（『復刻図書館学古典資料集』同文館、1918年、複製版）日本図書館協会、1978年、岩猿敏生氏の解説文のなかでこのように評価されている
- (3) 田中敬『図書館教育』（『復刻図書館学古典資料集』日本図書館協会、1978年、複製版）同文館、1918年、p.58
- (4) 同上、p.58
- (5) 本書での学校図書館は、公立図書館の蔵書から貸し出された図書を主に学校が管理するだけの資料が置かれた場所という認識が強く、現在の学校図書館との意味とは異なる。
- (6) 田中敬『図書館教育』（『復刻図書館学古典資料集』日本図書館協会、1978年、複製版）同文館、1918年、p.78
- (7) 同上、p.78
- (8) 同上、p.86
- (9) 同上、p.105
- (10) 同上、p.105
- (11) 同上、p.110
- (12) 学校図書館法（昭和28年公布）第四条第五項には「他の学校の学校図書館、図書館、博物館、公民館等と緊密に連絡し、及び協力すること」とあり、他の学校との連携が求められている
- (13) 田中敬『図書館教育』（『復刻図書館学古典資料集』日本図書館協会、1978年、複製版）同文館、1918年、pp.114～115
- (14) 白石克己〔ほか〕編『学校と地域でつくる学びの未来』（シリーズ生涯学習社会における社会教育 第2巻）ぎょうせい、2001年、pp.262～263

〔参考文献〕

- 田中敬『図書館教育』（『復刻図書館学古典資料集』日本図書館協会、1978年、複製版）同文館、1918年
- 石井敦編『図書館を育てた人々 ―日本編Ⅰ』日本図書館協会、1983年
- 図書館教育研究会編著『新 学校図書館通論』学芸図書、1999年
- 山本恒夫〔ほか〕編『新訂版 「総合的学習の時間」のための学社連携・融合ハンドブック―問題解決・メディア活用・自己評価へのアプローチ』文憲堂、2001年
- 白石克己〔ほか〕編『学校と地域でつくる学びの未来』（シリーズ生涯学習社会における社会教育 第2巻）ぎょうせい、2001年
- 鈴木真理〔ほか〕編『社会教育と学校』（生涯学習の新しいステージを拓く 第2巻）学文社、2003年
- 全国学校図書館協議会編『データに見る今日の学校図書館 '99～'03 ―学校図書館白書 4』全国学校図書館協議会、2004年
- 児童図書館研究会『児童図書館のあゆみ ―児童図書館研究会50年史』教育史料出版会、2004年
- 澤利政『学びを豊かにする学校図書館』関西学院大学出版会、2004年

学校教育における学校図書館の役割 (上道葉麻美)

(うえみち はまみ 教育学研究科生涯教育専攻修士課程修了)

(指導：山田 泰嗣 教授)

2004年10月15日受理